

# 文化

80年目の京大人文研

「拠点化」に向けた今後のあり方も話し合われた人文研教授会(10日、京都市左京区・京都大)＝撮影・水澤圭介



# 「無駄の効用」生む気風 転機

## 綾なす 知

6

「来年度から人文研は新しい一歩を踏み出します」。先月開かれた京都大人文科学研究所の80周年記念式典で、水野直樹所長はこう宣言した。

来年度、人文研には「全国共同利用・共同研究拠点」という役割が加わる。京大の附置研究所の一つから、日本全体の学術研究の重要組織として国のお墨付きを得たわけだ。従来の予算とは別に独自の研究資金も配分され、「認定されたことで、人文研の存在意義が明確になった」と水野所長は胸をなで下ろす。

しかし、当事者たちの胸中には複雑さも残る。実際、2007年度から進めてきた

の1949年、東方文化研究所、西洋文化研究所、旧人文研の3組織が合併して新・人文研が発足したが、決して前向きな理由からでなく、存続の危機にあった各組織を延命させるため統合せざるを得なかったからだ。

「その結果、普通なら別々に調理される素材が、こ

「今のままでは、就職や将来性の上で若い世代が人文科学に関心を持たなくなったり、研究者を志すのを

## 国の「拠点化」新たな一歩 独創の伝統をどう進化

た文部科学省との協議では、人文研のあり方に疑問符も突きつけられた。

「対象が人文全般というのはいまいすぎる」「60人も研究者が要するのか」「拠点となるには専門を絞り込むべきでは」……

った煮のように一つの鍋に入った。でも人文系が全部そろった訳ではなく、仏文学の講座はあっても、独文学がない、など、いびつさも残った

来年度の「拠点化」の目玉は、従来は人文研所員に限っていた共同研究の企画や班長を外部に開く「公募制」の一部実施だ。同時に、旅費支給の拡大や外部評価制度も導入される。代わりに、削減が続いてきた人文研の年間予算1億5千万円の18%にもなる2700万円が拠点費として増額されるはずだったが、ここへ来

一方で、所員たちによる共同研究や個人研究のレベルは今も高いと多くの専門家は指摘する。しかし問題は、それが「雑居ビル」(金氏)の強みを生かしてきた人文研という組織でなければならぬという理屈か、ともすれば受け入れられにくくなっていることだ。

「確かに、人文研の研究範囲は広い。これは長所であり短所でもある」。拠点化に奔走した金文京・前所長も苦笑するが、それには歴史的な理由がある。戦後

21世紀に入り、アカデミズムの世界にも、競争や成果がシビアに求められるようになった。生命科学、情

「無駄をなくして、厳しく成果を求めすぎる風潮は疑問。私の研究は『樸社の散木』やった。何の役に立つかわかんような学問やから自由にできた」。人文研OBで国立民族学博物館顧問の梅棹忠夫氏は話す。

「樸社の散木」とは『莊子』に登場する逸話。役に立たないから伐られずに大きくなったクヌギを指す。梅棹さんは、今の社会が効率や成果に目を奪われるあまり、自由に枝を伸ばし、葉を茂らすことで何かを生む可能性を摘んでいるのではないかと、と危惧する。

人文科学という学問を、有用な材木であるべきとみるか。無駄をはらんだ散木としての価値を認めるか。その問いは、81年目に向かう京大人文研と、学術研究を見つめる私たちにも向けられている。 || おわり (この連載は道又隆弘、河村亮、芦田恭彦が担当しました)



金文京・前所長



梅棹忠夫さん

□ メモ

共同利用・共同研究拠点 2004年の国立大学の独立行政法人化に伴い、公私立大学も対象に加えて創設された。研究資金が従来の予算の

報道、環境、ナノテクなどに国予算が重点配分される一方、成果が見えにくい人文科学を取り巻く状況は厳しい。

「無駄をなくして、厳しく成果を求めすぎる風潮は疑問。私の研究は『樸社の散木』やった。何の役に立つかわかんような学問やから自由にできた」。人文研OBで国立民族学博物館顧問の梅棹忠夫氏は話す。